

## 笛吹市教育委員会会議録

### 1 開会及び閉会に関する事項並びにその年月日時

会議名 令和7年度1月定例会  
開催日 令和8年1月9日  
開会時間 午後2時00分  
閉会時間 午後3時47分  
開催場所 笛吹市役所市民窓口館302・303会議室

### 2 出席及び欠席委員の氏名

出席者

教育長	望月 栄一
教育長職務代理	三井 久美子
教育委員	加賀美 公人
教育委員	鎮目 由美子
教育委員	古屋 修二
教育委員	押山 栄子

### 3 委員及び傍聴人を除く議場に出席の職員の職氏名

出席者	教育部長	手塚 克巳
	教育総務課長	吉田 孝至
	学校教育課長	角田 能一
	学校教育課教育監	黒澤 宏至
	学校教育課指導主事	橘田 昌樹
	学校教育課指導主事	三枝 寛康
	生涯学習課長	早河 明
	文化財課長	角田 幸侑治
	図書館長	松本 京子
	教育総務課総務担当	白倉 美智子
	〃	宮澤 真郁

### 4 他部署から出席の長及び事務局部職員の職氏名

出席者 なし

5 教育長等の報告の要旨

教育長	12月17日から1月9日までの事業報告
教育総務課	12月17日から1月9日までの事業報告
学校教育課	12月18日から1月7日までの事業報告
生涯学習課	12月19日から1月6日までの事業報告
文化財課	12月18日の事業報告
図書館	12月20日から12月23日までの事業報告

6 議題となった動議を提出した者の氏名

なし

7 議会に付した議案、議事の概要、議決事項(意見、発言内容要約)

報告第10号 令和7年笛吹市議会第4回定例会の報告について  
(手塚部長) 資料に基づき説明  
(古屋委員)

英語教育推進事業について、議会答弁のとおり英語力の向上の取り組みというのは大変意義深いものだと感じるが、その成果を確実に上げるために、学校現場の理解と協力が必要になると思う。具体的にどのような方法や工夫で現場の理解を深めて連携を図っていくか、教えていただきたい。

(黒澤教育監)

教育委員会でも学校現場の意見を受け止め、推進していきたいという思いが強い。今年度はワーキンググループを立ち上げ、中学校からは英語の免許を持っている校長と教頭、英語教員の5人、小学校からは、今まで英語に尽力してきた校長と教頭、英語専科教員等の教職員5人の計10人で、これまでに5回のワーキンググループ、2回の先進校視察を行った。その中で来年度ALTを導入する上での留意点やどのような活動を行っていくか話し合っている。また、現場への周知は、学校経営者会議でワーキンググループの様子を伝えているほか、2月に市内の教職員が全員集まる第3次教育研究全体会議において、委託業者であるアチーブゴールから来年度の方向性などについて、内容説明を行う予定でいる。

(古屋委員)

今、ワーキンググループで議論されているという話を伺ったが、そのワーキンググループで出された改善策や課題について具体的にお聞かせ願いたい。

(三枝指導主事)

7回のワーキンググループの中で、本市の現状やそこから見えてくる課題、それに対する対応策について議論いただいた。

まず課題については、英検3級相当レベルの子どもたちの数が非常に少ないということである。令和5年の英語教育実施状況調査では、本市は中学3年生で英検

3 級相当レベルの子どもたちが 26.2%なのに対して、全国では 52.4%と、大きな差が開いている。令和 2 年度に外国語活動が導入された当初は、これで頑張っていくのだという機運が高まっていたが、その後のコロナやギガスクール構想などによって、その機運が下がっている状況である。併せて ALT の状況についても、小学校では、ほぼ全ての英語の授業に ALT が参画しているが、中学校では、週 4 時間の英語のうち 1 時間しか ALT を活用できない配置状況にある。

ワーキンググループでは、具体的に本市の課題を 2 点に絞った。

小学校については、ALT だけではなく、専科教員の配置について課題があるのではないか。教員免許を持ち、学習指導要領を理解している日本人教諭と ALT の 2 人体制で授業を行うのが効果的で基本であるが、この日本人教諭の中で英語を専門にしている専科教員は現在 2 人配置され、小学校 14 校のうちの 5 校の勤務になっている。一方で、配置されていない 9 校では専科教員がいないため、担任と ALT が授業を行っている。担任はその前に国語や算数などの授業もあり、授業の事前準備や打ち合わせの質量では非常に差が生じている。

笛吹市内で同じ英語の授業を受けていても学校間で格差があるのではないか。併せて、小学校 1、2 年生には英語の授業がなく、1、2 年生の先生にはあまり関係がないという認識で、教員間における格差も生じているのではないかという課題が出された。

中学校については、学習指導要領の中で英語を使う目的・場面・状況設定がうたわれているが、ALT がいない授業であれば、日本語が通じてしまうので、英語を使わなければならないという状況がない。そういった場面で、英語の先生たちは、英語を使う必然性というところの場面設定に困難さを抱えているところに課題がある。

ワーキンググループから、改善策・提言案が 3 点出された。

1 点目は、徐々に ALT が学校の中に入っていくために時間が必要だという提言である。まず 1 年間 ALT が安心して授業に専念できるよう計画を立て、環境整備を行うことで、ALT 自らが自分の役割を確認しながら、児童生徒との信頼関係を築いて授業を展開していくことができる。これが更に年度を重ねることによって、日本文化への理解や笛吹市の環境にも慣れ、今度は英語の授業のアシスタントだけでなく、学校職員の 1 人として、学校全体の中で自分の力を発揮していけるのではないか。

2 点目として、小学校に新たな専科教員もしくは英語をアシスタントできる日本人教諭を配置するという提言である。現在小学校は専科教員が 2 人だが、少なくとも 14 校に配置するためには更に力のある教員 4 人が必要ではないか。

3 点目として、中学校では ALT 増員による変化と資質向上等に向けた研究 組織やこの取り組みを推進していく、機運づくりというところでの新たな組織を作って、英語教育が学校の中に馴染んでいくようにしてほしいという提言である。

付け加えて、英検推進の取り組みについても提言をいただいた。現在、中学3年生で実際に英検3級を取得したという人がわずか7.6%しかいない。この状況から、受験を受けるまでのハードルを下げる取り組みを推進していただきたい。

(古屋委員)

具体的にありがとうございました。先ほども申し上げたとおり、英語力の向上の取り組みが実効性を持つには、学校現場の理解と協力が何より重要だと思う。ワーキンググループを通して現場の声を丁寧に反映して、具体的な改善策を議論、実践していくことは、本当に心強い取り組みだと思う。今後も教員と教育委員会と一緒に連携を深めながら、成果が上がるように取り組み、その上で、成果をしっかりと確認しながら、改善を継続する体制作りを進めていただきたい。

(望月教育長)

英語のことが出ているが、他に英語に関わって何かあるか。

(加賀美委員)

ALTの活用について質問をさせていただきたい。ワーキンググループの中で議論をしているということだが、ALTの活用自体についてはどんな議論がなされているか。

(三枝指導主事)

小学校でも中学校でも、特に英語を使わなければならないという必然性を大事に授業しなければいけない。そのためには、ALTも資質向上を図っていかなければならず、視察した先進校にはALT同士が資質向上を図るための組織があり、教材を共有したり、その共有した教材を使って別の学校で授業をしたりというような活用をしている。作った教材を、今度は日本人教諭と共有をしながら、教材研究や授業のやり取り、学習指導要領に沿っているのか確認しながら授業を進めていくところが大事である。とにかくALTと日本人教諭がしっかり時間をかけて授業の打ち合わせや準備などを行うことが大事だと、ワーキンググループの中で意見が出された。

(加賀美委員)

ALTの配置については、どのように考えているか。またALTを効果的に活用していくことが大事だと思うが、そのためにALTの研修やサポート体制がどうなるのか併せて伺いたい。

(黒澤教育監)

配置については検討中である。22人配置されるということが決まっているので、その中でどのように配置するのがよいかワーキンググループの中でも議論した。本来だと、各校に1人ずつ配置できればよいが、22人のうち19人が配置され残りが3人になる。中学校の英語の授業が週4回、3学年と考えると、各校1人というのは難しい。優先すべきは、小学校も中学校も英語の授業でALTが入れる体制を考えたいと思っている。まだ確定ではないが、今のところ小学校については、大規模

校と中規模校は1人のALTが専属で1週間いられるような体制を考えている。小規模校については兼務という形で、例えば中学校のALT1人が中学校と小学校を兼務する形をとる。中学校ですべての学年、すべての授業にALTをと考えると少なくとも3人が必要となる。このような体制でできるのは、どんな形なのかである。また一番難しいのが、基本ALTの移動手段が自転車であること。例えば芦川小に自転車で行くのは事実上無理のため、そこはアチーブゴールにも考えてもらいながら配置を行う。

次に研修やサポート体制について、アチーブゴールにこれまでの先進校での実績があり、その中でALTの研修や資質向上への取り組みなどがあるので、それを参考にしながら研修を進めていきたいと考えている。また、今回これまでと違うのが、ALTが市の会計年度任用職員になることで、夏季休業中や平日等も1日勤務している。英語の授業だけではなく、日常的にALTが朝のあいさつ運動や給食の時間等に入り、英語に慣れ親しむ機会を増やしていこうと思っている。今後、教職員向けにALTを活用した研修も考えていき、市全体で英語を推進する体制、そして教職員の意識という部分で中学校の英語教員だけでなく、他の教員も英語を意識し、小学校と中学校で何ができるのかを考えてもらえるような場を設定していきたい。

(角田(能)課長)

今までALTはタブレット端末がなく、学校の共有パソコンで色々な作業を行っていた。今後教材作成やアチーブゴールとのやり取りなどもあるので、ALTの環境整備の一環として教員向けタブレットを配布できるよう12月補正で予算計上を行った。

(加賀美委員)

ありがとうございました。ALT22人の活用ということで、英語教育の質を高める上で大変重要な位置づけにあると感じた。ワーキンググループの中でも活用について、十分な議論がなされているので、ぜひたくさんの方の意見を基にして、活用方法についても詰めてもらいたい。また、配置について、各学校の実情にあった適切な体制を整えていただければと思う。ALTの持っている力を最大限に発揮されなければ、せっかく配置した意味がなくなってしまうので、研修体制、サポート体制の充実も図っていただき、英語教育の質の向上、子どもたちの英語の学力の向上につなげていただければと思う。

(望月教育長)

他に英語に関わって何かあるか。

(押山委員)

中学生の息子が、2学期に英検4級相当のテストをしてもらった。それでいい点数が取れた子は自信に繋がり、それなら英検を受けてみようかなという話が出ているようである。上の子は、英検の試験内容と普段の勉強が違うため、2つ勉強するのはハードルが高いと話していた。けれども、大学受験に挑む時に準1級には

受かっておいた方が有利ということで、慌てて取った経過がある。そのことを考えると、中学の頃から英検を受けるのが普通という状況になると非常にありがたい。中学 2 年の息子も今回のテストでちょっと自信に繋がり、英検に挑戦してみようかという話ができた。ALT の先生も 1 日常駐し、かなり積極的に言葉を交わしてくれることで、もう少し色々な先生がいるとたくさん話せるのにと話をした。

(角田(能)課長)

英検については、準会場として、学校で英検を受けられるような体制を作りたいと思っている。またアチーブゴールの英検対策講座(オンライン)を業務委託の中で提供してくれることになっている。他のところでは時間外や長期休業を使って英検対策講座を実施しているところもあるので、色々なところを参考にしながらプログラムを学校と相談する。

(望月教育長)

他に何かあるか。

(鎮目委員)

英検を積極的に受けられるように、学校がアナウンスしてくれたり、押山委員の話のように学校で試験をしてくれたりすると英検に関心のない子も関心が出てくる。英検が学校の授業に直結しないことや高校受験には全く響かないことで、興味なく終わってしまう子もいる。子どもによっては、自分が受けたら何級が受かるのかわかっていないという可能性もある。学校がアナウンスすることで、友達と一緒に今年は 4 級頑張ろう、次は 3 級に挑戦しようという見通しを持つことができると思う。そうすれば普段の勉強から評定 4 取ればいいんだとか、80 点や 90 点を取ると来年 3 級受かるかもねとか、普段の勉強ができない子が底上げできるきっかけになる気がする。また、今年は優秀な ALT が 22 人入るということで、各校 1 人は難しいという話だが、市長との話にあったように英検の前に ALT のリスニング講座を実施してもらえれば、ALT 自身も今年は何級を何人受からせようとか数字で結果が出るので目標にできたり、ALT 同士でどんな指導をするか話をするので双方に良い影響をもたらしたり、保護者も自信を持って受験させたりできると思う。

(三枝指導主事)

令和 6 年度から県の取り組みで英検 IBA 調査が実施され、それを受験することによって、自分が現在英検だとどれくらいの力を持っているのかということ把握することができる。これをきっかけに、今度は実際に英検を受けたい、受けてみようというハードルをどのように下げていくのかが大事だと思っている。現在、浅川中学校は英検の準会場になっており、取得率で他の学校と差があるのかを調べてみたところ、浅川中は 3 割を超える生徒が取得に向けて頑張っていた。一方で市全体の受験率は 15%くらいで、準会場にすることで、取得したいと思う生徒が倍になることがわかった。これらを参考にしながら、また取り組みを考えていきたい

と思う。

(望月教育長)

英語以外に何かあるか。

(三井職務代理)

社会教育施設の管理マニュアルについてこれから作成するようだが、危機管理のマニュアルも一緒につけていただきたい。何かあった時に誰につなげるかを決めておくことで、管理者も動揺せずに対応できるほか、一市民として安心できる。

(早河課長)

指定管理者から、危機管理の連絡体制等が提出されているので、安心していただきたい。またマニュアルについては現在策定中である。

報告第 10 号 全員了知

議案第 22 号 令和 7 年度末笛吹市立小・中学校県費負担教職員人事異動方針について

(黒澤教育監) 資料に基づき説明

(加賀美委員)

教育の推進や質の向上、働き方改革において、人的環境の整備というのは大変重要な部分だと思う。そうした中で、近年は未配置の問題が顕在化し、大変深刻な状況だと思うが、これに対して、県教育委員会はどのような対応策を講じられているのか伺いたい。市では市担講師を配置してくれているが、教員不足ということが市配置の教職員へ影響することはあるのか。

(黒澤教育監)

全県で教員不足のため、県の教育委員会も対策を考えている。例えば、本来採用試験は 7、8 月に行っているが、今年から秋の採用試験なども行いながら他県の方々にも試験を受けられる機会を設けている。7 月の試験では、東京で試験を受けられるような態勢を取ったことも聞いている。また、教職員の人事異動に関わって、異動や退職の希望を聞く時期が今まで 12 月だったのが、今年度から夏の時期に少し早めて、全県の教職員の異動や退職がどういう状況になりそうか早めに把握し、対策を講じている。

市担の状況だが、県の方が人的に不足しているという中で、笛吹市の市担への影響は少なからずある。今年度は御坂西小学校の市担講師 1 人が未配置のまま始まった。ハローワーク等で募集し 2 学期から配置することができ、これで市担講師は全部の学校に配置することができたが、来年度も同じ状況が続くと考えると、未配置になってしまうような状況も起きるのではないかと非常に危惧している。県費の職員については、今年度常勤の未配置はなかったが、非常勤については 7 人程足りていない状況である。県の方でも探しており、市でも誰かいればという状況だが、実際にはせっかくついている加配が人的な不足をカバーする形で、各校に負担が

かかっている状況である。

(加賀美委員)

今未配置の問題があったが、教育を充実させるために他に課題があったら教えていただきたい。

(黒澤教育監)

学校現場の人的な課題は、若手、新採用者の育成という部分である。特に保護者対応など非常に難しい現状の中で、新採用者が保護者対応を上手にするのはなかなか難しく、学校の中で工夫をして管理職等が上手に対応する方法を若い職員たちに指導することが必要になっている。また、中堅教諭が、全体の中で非常に少なくなっているところも人的な課題である。学校にあっては、30歳前の教員ばかりの学校がある。そのような学校が増えていく中で、どのように学校全体をバランスよく構成していくのか、校長の学校マネジメントの非常に大変なところだと感じている。

今、休職をしてしまう先生方も増加しており、その代わりになる教職員も見つからない。休職の原因は様々だが、そういう状況を生まないための学校組織の改善や、休みに入らなければならない職員が出た時の補充をどうするのか、県全体の課題と思っている。

(加賀美委員)

ありがとうございました。学校それぞれの状況を、ぜひ県に十分に伝えて、理解と適切な対応を求めていくことを教育委員会として進めていただければと思う。

(三井職務代理)

大学で教職の課程を取ったが教職員にはならないお子さんが多いと色々な場面で聞くが、どうして若い子供たちの芽が摘まれてしまう状況があるのか、教職が取れる国公立大学が2校あるので、県に調査をしていただきたい。

初心を思い出し、取得した教員免許を活かしてほしいと思う。

(角田(能)課長)

教育課程の3年生は、今年から来年にかけて採用試験を受けていく。実際に聞く話だと、やはり保護者の対応をすごく不安に思っている。

(黒澤教育監)

ある調査で、高校生のなりたい職業が数年続けて「学校の先生」でトップだったが、実際の教員採用試験を受ける倍率は低くなっている現実がある。そのような中で、県も色々な対策を講じており、例えば県教育委員会と山梨大学が連携して、現職の先生を大学に派遣し話をさせるなどの取り組みをしている。また、今年度は浅川中にも県教育委員会から連絡があり、笛吹市で教員をやっている浅川中出身の若手2人が3年生に向けて、教員になったきっかけや教員の魅力などについて講演会を行った。高校でも同じような取り組みを実施しているが、やはり教員の魅力というものを様々な場面で伝えていくのが一つ大事だと思う。

よく校長方と話すが、学校で働く教員がいきいきと楽しく働いている姿を子どもたちに見てもらうのが何よりかなと思う。それには、先生たちが元気に楽しく子どもたちと向き合える環境を学校が作れるように、私たち教育委員会が学校を手助けしていくことが大事だと思う。

(三井職務代理)

ありがとうございます。教育委員として、また一市民としても、こういうことをやってもらいたいということがあれば御教授いただきたい。

(黒澤教育監)

学校現場の現状を知るすべが、特にメディアやインターネットではないかと思うが、そういったところの情報が非常に学校に対して後ろ向きな情報が多い。ただ、実際皆さんも学校に行くと学校現場の素敵なところや先生たちが頑張っているところなど、前向きな情報はたくさんあるはずだと思う。そういう情報がなかなか広がっていかないところは非常に残念だと思っている。もし可能であれば、そういう学校の前向きな情報を積極的に多方面に発信していただけると、それが地道ではあるが、一つの力になると思う。ぜひ御協力いただきたい。

議案第 22 号 全員了知

議案第 23 号 笛吹市スポーツ推進計画(案)について

(早河課長) 資料に基づき説明

(古屋委員)

中学生の孫がいるが、どうしても土日に部活動をやりたい気持ちからクラブチームに登録した。笛吹で1つチームを作ってくれて、1回試合をしてくださったことに孫もすごく喜んでいて。スポーツ推進計画に、中学校部活動の地域展開を新たに取り入れていくという早河課長の話は、まさに子どもたちの喜びにつながっているのかなと感じた。来年度1つの部活動が地域クラブに移行するというのは、県のスケジュールもあるというように聞いているが、現在の取り組み状況というのはどんな感じなのか。

(早河課長)

県からは令和8年度には必ず1つを地域クラブにするよう言われている。最終的には、令和13年度までに休日の部活動をすべて地域スポーツ・文化クラブへ移行していくことになる。その中で、次の議題にあるが、まず本市でも部活動地域展開推進協議会を立ち上げる予定でいる。今先行して笛吹市のサッカーが合同クラブのスポーツ少年団として活動しているので、そこからの申し入れを協議しながら進めていこうと考えている。3月には保護者への説明会を予定しているが、保護者の方々が安心して通わすことのできる地域クラブを目指すために、推進協議会を立ち上げた後は、協議会である程度地域クラブの要件等をもみ、移行を加速させていきたい。

(古屋委員)

ありがとうございました。これからというところもうかがえるが、私も長年スポーツの指導者として携わってきた経験から、学校で自分たちのチームというのもとても大事なことだが、もう少し未来に向けて子どもたちが成長していくために、地域と連携した部活動の展開は、とても子どもの健全な育成や地域コミュニティの活性化につながる重要な取り組みだと思う。今後もぜひ地域展開をさらに充実させて、持続して、しかも幅広い活動が展開されることを期待している。

議案第 23 号 全員了知

議案第 24 号 笛吹市部活動地域展開推進協議会委員委嘱について

(早河課長) 資料に基づき説明

議案第 24 号 全員了知

8 教育長が必要と認める事項 (議事資料)

なし

議事録署名

笛吹市教育委員会 教 育 長 \_\_\_\_\_

教 育 委 員 \_\_\_\_\_

教 育 委 員 \_\_\_\_\_

作 成 職 員 \_\_\_\_\_